

【竹内整二】 それでは総合討論に入っていきたいと思います。

ここまでのご発表でも、「東アジアの死生学へ」という大きなテーマをめぐって、単に西洋でなくこちらへというような二者択一的な問い方ではなく、あらためて東アジアということを主題化することによって、より広いと言いますか、より深いと言いますか、鄭孝雲先生のお言葉を借りれば、死生学に関する新しい普遍可能性というようなものをどのように考えうるかということが問われてきたと思います。時間が限られておりますが、できるだけ大勢の方にご発言いただければと思います。

【金森修（東京大学教授）】 東京大学教育学部の金森修と申します。専門はフランスの現代哲学ですが、一期アメリカの生命倫理の歴史を調べてみたことがあります、それが縁で竹内先生と研究会などご一緒する機会が何度かありまして、本日もここに参加させていただいています。

今日のここまでのご発表は、思想的あるいは文学的な材料が中心だったと思いますので、死生学そのものからは若干離れて生命倫理に近い話になりますが、私の個人の経験から、ある政治的なことを一つ情報提供として申しあげたいと思います。

私はこの十年ほど、文部科学省でES細胞の審査委員を務めてまいりました。ご存知の通り、一九九八年の末にアメリカで初めてヒトES細胞が作られると、それにたちちに日本の医学界が反応し、日本でもES細胞研究を進めるべきだという考えがあがりました。私はごく初期からその委員会の一員だったわけですが、本来ならばより包括的な生命倫理に関する法律を作るべきところを、日本の場合はいろいろな理由でこの話題に関



金森修氏

する総合的な法律を作ることができておりません。たとえば尊厳死とか中絶とかES細胞とか、それぞれが個別の問題として違う省庁で議論されており、しかも法律ではなくて行政指針という、刑事罰を課すことのできない一種の紳士協定のようなもので、こういうふうにしてください、ということしか言えない状態が続いております。ただ、ヒトクローンに関しては特定の法律ができたんですけれども。

ES細胞の話に戻りますと、受精卵の破壊をしなくてはいいけませんので、日本としては比較的厳しい規制をしていまして、平均で年に七、八回の委員会を文部科学省でやっていました。そしてそこで使う審査の資料が七、八センチもの厚さがあるんです。そのために、関係する研究者からは、こんなことでは研究ができないという不満の声があがっておりました。そのような中で、韓国で黄禹錫事件（二〇〇五年に発覚した、ES細胞捏造、研究費詐取などの事件。黄禹錫はそれまで韓国で最も有名な生命科学者の一人だった）があつたわけで

す。それはやはりこの仕事に関係する各所にいろいろな衝撃を与えました。そしてその報道の中でも特に、その実情は定かではないのですが、少なくとも日本で当時報道されたことの中で、国の科学の発展のために若い女性が積極的に自分の卵子を提供したということは、我々に変な衝撃を持つて受け止められました。

ところがその後、若干状況が変わりました。最大の理由はiPS細胞が京都大学の山中伸弥先生によって開発されたということです。iPS細胞は皮膚などからできますので、倫理上の問題がほとんどありません。そしてその開発によって、ある興味深い変化が起きました。iPS細胞とES細胞は似た性質を持ち、し

かも使用目的も似ていますので、iPS細胞の研究を活性化させるために、ES細胞に課せられていた従来の重い規制をはずすべきだという政治的な判断がはたらくようになったのです。そのため大幅な規制の解除が行われ、数年前までは先ほど申しあげたように年に七、八回、分厚い書類を使つて審査をしていたのが、今は年に一、二回、ほんの薄い書類での審査になってきています。つまり、ES細胞に関して、国はもうほとんど規制はしないということです。もちろん指針は守りつつということ、紳士協定はあるんですけども、事実上の規制はもうしないということです。そうしますと、iPS細胞の場合は皮膚などの細胞を使うので特に問題は無いのですが、ES細胞の場合には受精卵の破壊、つまり受精卵という、本来ならば赤ちゃんに育つ可能性があるものを純粋にモノとして見て、それをどうやって使うかということになってきますので、そういうことに関する感性といえますか、センシビリティが、やはり産業化の中で壊れ始めているということが言えるのではないかと思います。

先ほどこの話題は死生学それ自体の話題ではないと申しあげたのですが、実は本質的な関係がある話と言えるわけです。以上、ほぼ純粋な情報提供ですが、日本のある現状を報告いたしました。

【竹内】 大事なお指摘、ありがとうございます。今の金森先生のご発言に対して、韓国側からコメントがありますでしょうか。

【呉進鏐】 私も科学者ではないのですが、あまりにも医学、あるいは科学中心に死の定義がなされていることに問題を感じています。たとえば脳死は、現在では医者による死の判定基準の一つになっています。しかし、それが本来の意味での死の定義に適合するものなのでしょうか。日本でもそのことが具体的場面で問題になっ

ているように思います。

【金森】 脳死に関しては、従来脳死者からの臓器提供があまりに少なかったために、その促進のため二〇〇九年に法律が改正され、二〇一〇年から劇的に変わりました。それから、義務ではないのですが、脳死状態になった時にあなたは臓器を提供するかしないかということ、健康保険証に意思表示させる、つまり国民全員に意思表示させるという手法がとられるようになりました。

もう一言だけ付け加えさせてください。死の理解などが科学的な視点ばかりによって行われているということはその通りだと思うのですが、それだけではなくて、科学の研究というものには、純粹に客観的な事実を探究するという目的と同時に、それによって作られる事実によって産業を活性化させるという目的が非常に強くあるということの問題を考えなければならぬと思っています。たとえば脳死の場合、移植者はその後大量の薬をずっと飲み続けなければなりませんので、移植者が増えるということは、製薬会社の巨大な利益になるわけです。ですから、脳死による臓器提供の推進運動の背後には製薬会社などの存在があるわけで、たとえば病気の子どもを臓器移植によって助けるという本来的・医療的目的と、そのような製薬会社の利益関心等とが融合してしまうということ自体が、おそらくは今の我々の時代の最大の問題の一つなのではないかと思っています。

【四】 たとえば脳死の場合、それは死そのものの定義として有効なのでしょう。もしそれを受け入れるとしたら、人間の死は単なる肉体だけのものになってしまう。それをそのまま受け入れてしまう、そういう現実が問題なのではないかと思うのですが。

【池澤優】では私の方から呉先生に質問なのですが、先ほどの私の発表の際にも呉先生から死の定義はどういうものかという質問がありまして、正直申しますと、意味がわからなかったんです。なぜかと言いますと、我々日本側の、主に生命倫理関係での議論の中で出てきた論点の一つとして、おそらく死の定義を一つには決められない、という考えはほぼ当たり前のことになってきているんですね。なので、呉先生は死の臨牀的定義をやれとおっしゃっているのか、それとも死の現象的定義をやれとおっしゃっているのか、そこがわからなかったのですが、どうなのでしょう。

【呉】臨牀的、現象的といった問題を超えてですね、臨牀および科学を含めた包括的な生死学的な意味における死とは何かという意味で質問しました。

【池澤】おっしゃりたいことは大体わかりました。以下は情報提供というような意味で申し上げますと、一九八〇年代後半から一九九〇年代前半にかけて、日本では脳死の議論が非常に盛んで、おそらく世界中でこんなに脳死の議論をやった国は他にありません。その結果出てきた論点の一つが、先ほど申しあげたように、死という一つの現象はないという見方です。

私自身の死と私の親しい者の死は、同じ死という言葉を使っている、現象としてはまったく違うわけです。たとえば、私自身が心臓は動いていても不可逆的に意識がなくなった場合、そういう状態では生きていたくないと自分で思うだろうと思います。が、私の親が同じ状態になった時、どういう状態であっても生きてくれと、きつと思うんです。そうすると、私の死と私の親の死というのは、実は現象としてはまったく違うということになるわけです。今の例は私のまとめ方ではありますが、このような考えは、日本の生命倫理で出てき

た一つのかかなり独特な論点だろうと思います。

【呉】 死に関する定義はないということに、衝撃を受けたのですが……。

【池澤】 はい、単一の定義はないです。ただし、臨床的定義はあります。それはないと困る。

【呉】 私たちは医師ではないので、生死学における死に関する定義が大事なんだと思うんです。しかし日本ではそういう死に関する定義がないというのは、個人レベルでのご意見なのですか。それとも日本の学界全体の意見なのでしょうか。

たとえばキュブラー・ロスは、死とは肉体という服を脱いで違う世界に旅立つようなものだというふうな言い方もしていて、それと同時に、現代は死に対する定義がないということを批判していましたが、それについてはどのようにお考えですか。

【池澤】 おっしゃりたいことがだんだんわかってきました。結論から先に言いますと、呉先生が使っている「定義」という意味で、私は「定義」という語を使っておりません。これは私が宗教学とい



うのをやっていることからの必然的な帰結なんですけれども、私にとつての定義とは、さまざまな分野を研究している学者が、同じ土俵に아가って話をするための共通の約束事なんです。呉先生が言おうとしている死の定義は、私が「本質規定」という言葉で言い表しているところです。死の本質規定ということになると、私が論文の中で引いた、エンゲルハートの言っていることが、最大公約数的現象だと思います。

要するに、多元的な状況にある現在の社会では、これこそが死であるという文化を我々は共有できなくなっているというのが現状だろう、と。良い悪いは抜きで、これが現状だろうと思います。ですから、我々が完全に共有できるような死の本質規定を作ることとは無理かもしれませんが、死生学という学問は、それに近づけるようなことをやろうという試みだと言えるだろうと思うんですね。そのためには対話・議論が必要なので、議論なしで本質規定をやるのは、たぶん宗教です（笑）。

【呉】 もし、一般の方が今の池澤先生の発言を聞いて、死生学という学問は、死についての何の定義もないのに、ある国でどのように人を教えて、どのような役割を担っていくことができるかというような質問が来た時に、どのように答えられるのでしょうか。

【池澤】 それはわりと簡単ではないでしょうか。今作っているところです、と。それを作ることが学問であり、運動であると思います。

【竹内】 死の「定義」なり「本質規定」ということをどう考えるかという問題かと思いますが、たとえば崔一凡先生が、人は死んだ後も、生きた側の誠によってなお存在しているんだというふうに言われましたね。今、



福間聡氏

呉先生は、自然あるいは生物学的なところでの「定義」から始めなければと言っておられると思うんですが、そうした次元の話と、崔先生の言われるような死と、どうつなげて考えたらいいのか。同じ死という言い方ですが、それが指す事態は、本当にいろいろな幅を持つように思います。

今の問題が続けても結構ですし他の問題でも結構ですので、あげてください。

【福間聡（東京大学COE研究員）】 東京大学研究員の福間聡です。専門は倫理学ですが、英語圏の、特にアメリカのジョン・ロールズという政治哲学者の研究をしています。それとの関係で質問したいと思います。

社会学という、医学と社会学や哲学などがミックスされた研究分野があるんですけども、その分野では最近、経済格差は健康に悪い、というテーゼが唱えられています。なぜかという、経済格差がある社会に住んでいると、人々がストレスを感じてしまい、それがさまざまな病気の原因となっているというデータが出ているからです。日本でもここ数年三万人以上の自殺者が出ているのですが、先ほどの発表で、韓国の方が日本よりも割合的には自殺者の数が多いことを知りました。日本でも現在、生活保護を受ける人が多く、ここ十年の間にかなり経済格差が広がったと言われています。先ほどの発表に、核家族化が進み、それによって祖父母らの姿を見ておらず、それによって死というものをあまり実感できないようになって自殺者が増えたのではないかという指摘もありました。韓国も今経済発展していると思うのですが、経済格差も広がって

いるのではないでしょうか。そして経済格差が広がることによって精神的なストレスが生じ、自殺にはいろいろな原因があると思うんですが、その一つである鬱を引き起こすというようなことがあるのではないのでしょうか。そのような、韓国における経済格差が自殺との関連で研究されているということがあるのかをお聞きしたいと思います。

【呉】 ご指摘の通り、経済格差の問題が自殺の原因の一つになり得ると思っています。日本はかつて自殺大国と言われていましたが、今の韓国の状況は、大国を超えて自殺超大国になっています。ご質問の通り、韓国でも九〇年代末頃に金融危機があつて、経済格差の問題が社会問題の一つとして浮上してきました。一つ具体的な例で申しあげますと、たとえば名門大学に入るための競争は、韓国も日本も同じように熾烈だと思っています。しかしながら韓国では大学卒業後の就職がたいへん大きな問題になっていまして、正規の職に就くことができる人は限りなく少ないですね。競争率が数百対一というくらいに、かなり厳しい。ですから正規職に就くことができずに挫折してしまう若者たちがかなり多いんです。

ですから、韓国における自殺率の増加という問題の背景には、やはり国家政策の失敗があるだろうと思います。金融危機以降も、国家的政策や社会的対話などの制度は非常に貧弱です。日本の場合、自殺予防のための法律もあつて、白書も毎年刊行される。しかし韓国の場合は、そういった努力は現在のところ見当たりません。

【竹内】 その問題は非常に大きな問題なので、一言だけコメントさせていただきます。

韓国あるいは日本の自殺率の高さには、今言われたような格差などの生きづらさの問題があるわけですが、そのことは前提に、ただしかし、生きづらさだけの問題ではなく、——言い方が非常に難しいんですが——、

そのかげに死に易さといったような問題もあるのではないかと思います。

日本人の死生観には、死ぬことをたとえば「往生する」「成仏する」というように、本当に良い状態になることを意味する仏教用語を使って表現するようなどころあるんですね。死ぬということを、楽になったり、あるいは良い世界に行くことなのだと捉えているところがあるかと思います。これを今どう受けとめたいかという問題があるかと思います。むろん、そのことは、生きづらさの問題を問うことを相対的にゆるめて考えていいということではありませんし、また、逆に、「往生する」「成仏する」といった発想自体が死生観として良くないものなのではないのではありません。ただ、こうした発想が生きづらさと重なった時に、自殺の急増という現象が起こりやすいということがあるのではないかと思います。

そのへんの問題は、韓国の場合には、どうなのかがちょっと気になっています。

【鄭孝雲】 今、死ぬことと自殺の二つの問題が出てきていますが、はたしてこの二つを同一視していいものなのかがまず問題になるのではないかと思います。

二番目に、自殺の問題を取りあげるとき、特に重点が置かれるのが青少年になりますが、現在は老人の自殺率もかなり高い数字になってきています。ですから、自殺の理由としては経済等ももちろん問題になるんでしょうが、孤独の問題なども見ておかなければなりません。また、韓国ではつい最近も有名人が精神的苦痛のために自殺をするということがあったのですが、そのような苦痛から抜け出すために自殺をしてしまうというケースだつてあるわけで、そこも見ておかねばならないと思います。

三番目に、死についていろいろな話題が出ているんですけども、人文学者のお話がほとんどで、人文学者ならば基本的には同意しているところも多いと思うんです。それで、今日は自然科学をご専門にしていらっ

しやいます李^{イトクワン}惠煥教授にもお越しいただいていますので、李教授から自然科学的な側面における死についてお話をうかがいたいと思います。

【李惠煥（西江大学校教授）】 李惠煥と申します。理論科学が専門で、西江大学で科学共同コミュニケーションを研究しております。本日この会議に出席して、私にとつてはこういった人文学者の会議はかなり新鮮に感じられました。七時間も、真摯に共に対話しようという姿勢に感動しました。ある意味過酷であり、非人間的な会議にも思えたんですが（笑）。

先ほど金森先生が黄禹錫事件について言及されました。韓国の女性たちが自発的に卵子を提供したとおっしゃっていたと記憶していますが、それは事実に反する部分もあるのではないかと思います。この黄禹錫という人は新興宗教の教主のような独特のカリスマ性があって、いろいろなところから人をかき集めたというところもあります。そういった諸般の事情も考慮していただけたらと思っています。

そして韓国の自殺問題なんですが、これには経済格差の問題もたしかにあると思います。しかしながら最近の問題としては、それに加えて競争の問題がかなり大きく台頭してきています。競争は不合理であると感じ、誰も納得していないのに、それが現実としてひとつとに突きつけられていて、しかも熾烈で逃げるのができない。このような状況で、教育に関するいろいろな問題が出てきています。韓国ではこの二十年の間に、家庭教育という言葉が無くなりました。また、社会教育という言葉も無くなった。教育はもっぱら学校にまかされていて、しかも学校はたいへん非効率な教育を行っている。このような教育の問題が自殺の一つの原因となっているということも考えられる。

今日この会議に参加させていただいて、非常におもしろく、かつ新鮮な経験をさせていただきましたが、も

う少し議論すべきところもあるのではないかという感想を持っています。

たとえば、死生学といった学問は、自由や人権、平等といった近代的概念が本格的に適用されて初めて登場することになったのではないのでしょうか。つまり、身分を問わず、すべての人間の死ということが問題になってきて、すべての人間の死に関して語り合うという時代になった。これは歴史上初めてのことだと思います。

さらに、二十世紀は技術の進歩が著しく、医療分野も目覚ましい変化を遂げてきたわけです。そしてそれが死の過程にも影響を与え、現在では相当な水準まで死をコントロールすることができるようになった。ご発表にありました胃瘻の問題なども、その事例の一つです。いまや医療技術によって無制限といつていいほどに延命させることもできるわけで、そのような死の過程というものが一つの問題になってきている。

要するに、大きくは二つの問題があると思っています。先ほど、あらゆる人の死が問題になるということが歴史的に初めてのことではないかと言いましたが、一番目は、社会の民主化とそれにもなう認識の変化の問題、二番目は、技術の進歩にともなう死の過程の変化についての意見や見解です。そういった問題もこのような死生学の議論に含めておくべきではないかと思っています。

この五十年で自然科学は爆発的に発展しました。死生学や死についての認識は、宇宙観や自然観、あるいは生命観とも深い関係を持っていますが、この五十年間でそういった科学的認識が一八〇度変わってきたわけです。たとえば宇宙の生態についての認識、星についての認識、また宇宙の姿についての認識が変わり、宇宙の歴史についても違った認識が登場してきた。生命科学は生命の現状といったものとも関連していますから、これまたこの五十年間で変化してきました。DNAも変化してきました。今、自然科学では文化的進化ということを主張しています。要するに、民族や人種に関して、従来とは異なった観点で見るようになってきているわけです。たとえば、人間が他の動物に比べて優越な存在だということについて、昔は脳の大きさを持ち

出してきた議論がなされた時期もあったんですけど、たとえば象の脳なんかは人間の脳よりはるかに大きい。でも人間の方がはるかに優越なわけなんです。そこで、自然科学では集団知能ということが問題にされているわけです。一人の人の知能が、社会と、七十億の知能と連動しているという議論がなされてきています。また認知科学の分野でも、考えるとはどういうことかということについて、脳から考えるのではなく、身体全体から考えていこうという新しい発想が出てきています。さらには、環境も脳の認識の一部を構成しているという考えも出てきた。また、社会についての認識においては、些細な一つの動きが大きな結果をもたらすということが重視されてきています。現代では、必然が重要ではなく、偶然の方がはるかに重要とみなされてきています。あるいは、スモール・ワールド・ソサエティーという言葉があるように、この世界においてはすべてがつながっているという認識も出てきた。そのように、現在は宇宙観、自然観、生命観、そういったものがすべて変化してきているわけです。

そういった現在の時代状況にもかかわらず、あえて伝統を強調するような今回の会議に、少し違和感をおぼえました。正直申しあげますと、「東アジアの死生学へ」というタイトル自体にも、少し違和感があります。けれど、東アジアという地域的なカテゴリーに留まるものではない、というお話を聴いて安心しました。現在の死生学は、東アジアのようにある地域に限定されるものであつてはならないと思います。そして、これからむしろ東アジアから積極的に、現代の死生学というものを作っていかなければならないと考えております。

【竹内】 どうもありがとうございます。時間がございませんので、ごく簡単に今の先生が言われたことに答えします。

自然科学の分野を中心にいろいろな物の見方が変わってきたということは、本当にその通りだと思いますが、

生き方や死に方というものは、発明したり新しく作ることができないものだと思っています。ですから、今のお話にあったような自然科学的、社会科学的な変化を受けとめながらも、過去にたくさんの人々が実際に生きてきた生き方や死んできた死に方をふまえ、その上でどうすればより良い死に方、より良い生き方ができるかということをおぼえて考えるのが死生学だと思います。李先生のおっしゃったことに反対ということではなく、死生学では、現在の状況と伝統的な問題を併せて考えるべきだと思っています。

【李】 まったく同感です。